

争いの被害者のパーソナリティと赦し

—視点取得の効果に着目して—

福本 都 (東京大学 大学院人文社会系研究科, miyako-fukumoto821@g.ecc.u-tokyo.ac.jp)

橋本 剛明 (東京大学 大学院人文社会系研究科, hshmt@l.u-tokyo.ac.jp)

唐沢 かおり (東京大学 大学院人文社会系研究科, karasawa@l.u-tokyo.ac.jp)

Perspective-taking mediates the effect of Victims' personalities on forgiveness

Miyako Fukumoto (Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo, Japan)

Takaaki Hashimoto (Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo, Japan)

Kaori Karasawa (Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo, Japan)

Abstract

The present research examined the possibility that a victim's perspective-taking to the perpetrator, which has been argued to be a promotor of the victim's forgiveness, does not take effect under certain personalities. Based on the finding that perspective-taking positively correlates with two of Big Five personalities (Toto, Man, Blatt, Simmens, & Greenberg, 2015), we examined whether openness and agreeableness moderate the degree of perspective-taking's effect on forgiveness. In the experiment, we first measured participants' personality on the Big Five scale and presented them with a vignette describing a situation where one becomes a victim of transgression; participants read the vignette under the manipulation of perspective taking (transgressor perspective or no perspective taking). Lastly, we measured participants' levels of forgiveness. The results indicated that the participants who took the transgressor's perspective reported weaker motivations of revenge and avoidance specifically when they were low in openness. Furthermore, perspective-taking mitigated the revenge motivation among people low in agreeableness while not among those high in agreeableness. The results suggest that people either high in agreeableness or in openness are likely to engage in spontaneous perspective-taking while the prompt to do so takes a more strong effect among those low in such personality traits.

Key words

forgiveness, agreeableness, openness, perspective-taking, conflict resolution

1. 序論

赦しは、他者からの攻撃を受け争いや葛藤を経験した後にもたらされる経験であり、その後の対人関係に大きな影響を与える。赦し (forgiveness) は、McCullough, Rachal, Sandage, Worthington, Brown & Hight (1998) によって、「攻撃によって引き起こされたネガティブな感情、認知、動機が低下し、加害者に対するポジティブまたは中立な感情、認知、動機が取り戻される変容過程」と定義されている。赦しは単なる怒りなどの感情とは異なり、加害者に対するひとつひとつのネガティブな感情、認知、動機の低下を包括的に説明する概念であり、ネガティブな気分の低下 (Fitzgibbons, 1986; Hebl & Enright, 1993) や精神的・身体的な健康状態の改善 (Trainer, 1981; Baskin & Enright, 2004) といったことに効果がある。深刻な被害にあった個人においても、赦しを導く介入によって自尊心、希望が上昇し落ち込みや不安が減少することが報告されている (Freedman & Enright, 1996)。このことから、赦しは、争いや葛藤を経験した後の被害者が精神的健康を回復するために重要な役割を担うといえる。では赦しはどのような要因により促進されるのだろうか。本研究では、被害者のパーソナリティに着目したうえで、それが視点取

得(被害者が加害者の立場に立つこと)に影響することで、赦しの程度が異なる可能性について検討する。

McCullough & Hoyt (2002) は、赦しと被害者自身のパーソナリティの関連を検討している。具体的には、加害者に対する報復・回避・慈愛の3つの動機づけ因子を想定した18項目からなる赦しの尺度 Transgression-Related Interpersonal Motivation (TRIM; McCullough et al., 1998) と、Big fiveを測定する尺度 Big Five Inventory (BFI; John, Donahue, & Kentle, 1991) を用い、被害者の加害者に対する動機的傾向と被害者の Big five の関係を調べた。その結果、協調性パーソナリティと、加害者を避けようとする「回避的動機づけ」との間に負の相関がみられた。また、協調性は、加害者に報復しようとしたり加害者が相応の報いを受ければよいと考えたりする「報復的動機づけ」に対しても、負の相関を示していた。この結果について、McCullough らは、協調性の高さが、ネガティブな出来事をあまり反芻しないことにつながるために、加害者への報復的動機づけや回避的動機づけが低下したからであると考察している。たしかに、ネガティブな出来事の反芻は、その出来事に関する記憶のネットワークを刺激するため、その出来事の生起時と同様のネガティブ感情を喚起し (Miller & Roloff, 2014)、加害者に対するネガティブな動機が維持されやすいことが示されている (McCullough, Bellah, Kilpatrick, & Johnson, 2001; McCullough, Bono & Root, 2007) ことから、このような考察には一定の妥当性

があるだろう。

加えて、協調性が高いと加害者に対して共感を示しやすい (Ashton, Paunonen, Helmes, & Jackson, 1998) ことによっても、報復的動機づけや回避的動機づけが低下する可能性も、彼らは指摘している。共感 (empathy) は、赦しのプロセスにおいて重要な役割を果たすことが議論されてきた変数である (McCullough, Worthington, & Rachal, 1997; McCullough et al., 1998; Sandage & Worthington, 2010; Welton, Vickers, Kim, Ford, Lawton, MacLennan, Meredith, Martin & Meade, 2008) が、共感の下位概念の中でも、視点取得は特に、赦しを促進することが報告されている (Takaku, 2001; Romero, 2008; Day, Casey & Gerace, 2010)。なお、視点取得は、積極的に相手の心理的観点をとろうとすることと定義される概念であり (鈴木・木野, 2008)、ここでは被害者が加害者の立場になって考えることを指す。例えば、Takaku (2001) は、日常場面での争いに関するシナリオを参加者に読ませ、視点取得の有無による赦しへの効果を検討した。そのシナリオの中では、被害者は「あなた」と表記され、参加者が被害者であるという設定になっていた。参加者がシナリオ中の加害者に対して視点取得を行うかについては、シナリオ前の指示によって操作を行っていた。具体的には、「自分自身が過去に他者を傷つけた経験」の想起をあらかじめ求める、「自分が (シナリオ上の) 相手であればどう思うか」を考えさせる、「相手がどう思ったか」を考えさせる、という3種類いずれかの方法で視点取得を促す条件に、特に具体的な指示を行わない統制条件を加えた計4条件で、シナリオ中の加害者への態度を比較した。その中で、赦しの程度が最も高かったのは、自己経験の想起を通じた視点取得の条件であった。また、相手がどう思ったかの意識的推論を求める視点取得条件においても、統制条件に比べて赦しの程度は高かった。このように、被害者が加害者に対して視点取得をすることによって、加害者を赦しやすくなるということが分かっている。

これまで述べてきたように、争いが起こった後の状況では、被害者自身のパーソナリティも視点取得も、赦しを左右する要因である。これまで、それらは別々に検討されてきたが、現実場面で生じる多様な争い場面のなかで、個人が赦しに至る過程を精緻に理解するためには、知見を統合的に検討することが求められるだろう。とりわけ、これらの知見を実際的な問題の解消に応用するという視点で考えたとき、個別的な検討では不十分である。例えばパーソナリティごとの相対的な赦しやすさが分かったところで、パーソナリティを変えることは困難であるため、実生活に応用することはできない。また、視点取得をすることによって赦しやすくなるという知見を、対人葛藤後の精神的疾患の治療場面に導入している例があるが (Freedman & Enright, 1996)、これも、被害者自身のパーソナリティによっては効果的でない可能性もある。そのため、より個人に最適化した適切な介入を目指すのであれば、治療者は個人差に対してどのように対応すべきかを把握する必要がある。視点取得の効果の違いをパー

ソナリティ別に明らかにすることによって、視点取得の赦しへの効果にかかわる知見をより適切に活用できるかもしれない。実際、Big fiveの協調性や開放性と視点取得傾向との関係を検討した研究は協調性や開放性が高い人が視点取得をしやすいくことを示唆している (Toto, Man, Blatt, Simmens, & Greenberg, 2015)。このことから、協調性や開放性が高い人は視点取得を促すような働きかけがなくても自発的に視点取得を行いやすい傾向にあり、それに対して、協調性や開放性が特性的に低い個人においては、視点取得を促す操作の結果として、赦しが促進されることが予測できる。

以上の議論に基づき、研究では、シナリオ実験によって、Big fiveの5つの下位因子ごとに視点取得による赦しへの効果を調べることを目的とした。本研究で検証した具体的な仮説は以下の通りである。なお、仮説1、仮説2は先行研究の結果 (Takaku, 2001; Romero, 2008; Day, Casey & Gerace, 2010; Toto et al., 2015) を検証するものである。

- 仮説1：被害者役である実験参加者が、加害者役であるシナリオ上の人物に視点取得をする条件では、実験参加者の赦しは促進される。
- 仮説2：協調性が高いと、赦しは促進される。
- 仮説2'：協調性の高い個人ほど、もともと視点取得傾向が高いため、仮説1から外れ、視点取得の操作の効果が弱くなる。
- 仮説3：開放性が高いと、赦しは促進される。
- 仮説3'：開放性の高い個人ほど、もともと視点取得傾向が高いため、仮説1から外れ、視点取得の操作の効果が弱くなる。

2. 方法

2.1 参加者

LINE、Twitter、Facebook上で実験参加者を募集し、大学生172名 (女性80名、男性77名、その他・未回答15名; 18~32才、平均年齢20.94、標準偏差1.58) から回答を得た。

2.2 手続き

ウェブ上で回答可能なアンケートの形式で、シナリオ実験を行った。アンケートの構成は、以下のとおりであった。

2.2.1 Big fiveの測定

日本語版 TIPI-J (Japanese version of Ten-Item Personality Inventory; 小塩・阿部・カトローニ, 2012) を用い、Big Fiveを「全く違うと思う、違うと思う、どちらかと言えば違うと思う、どちらでもない、どちらかと言えばそう思う、そう思う、強くそう思う」の7件法で測定し、個人差変数として扱った。この尺度は、外向性、協調性、開放性、誠実性、神経症傾向という性格の5因子 Big Fiveを、それぞれ2項目ずつの10項目によって測定したものである。

2.2.2 視点取得の操作

参加者が日常場面で他者から被害を受けたという設定のシナリオを提示した。その際、参加者が、加害人物へ視点取得をする（以下、「視点取得条件」）かしない（以下、「統制条件」）かを、シナリオ前の教示の内容によって操作した。

視点取得条件の教示は以下のとおりである：

「次のシナリオ上の「あなたのクラスメイト」が何を考え、感じたかを想像しながらシナリオを読んでください。シナリオを読む間は、与えられたすべての情報に注意しながら、あなたのクラスメイトがどのように考え、感じたかを思い描くことに集中してください。」

統制条件の教示は以下のとおりである：

「もしあなたの身に実際にこのような出来事が起こったら何を考え、何を感じるかを想像しながらシナリオを読んでください。シナリオを読む間は、与えられたすべての情報に注意しながら、あなたがどのように考え、感じるかを思い描くことに集中してください。」

なお、Takaku (2001) では、「自分自身が過去に他者を傷つけた経験の想起」という形で視点取得を操作し、赦しへの効果を検討している。一方、本研究では、協調性と視点取得の関連を確認した Toto et al. (2015) の研究で用いられた多次元共感性尺度（登張, 2003）の視点取得の項目（「怒っている人がいたら、どうして怒っているのだろうと想像する」「友達の間からは物事がどう見えるのだろうと想像し、理解しようとする」など）に倣い、「相手がどう思ったか」を参加者が考えるよう促すことで視点取得を操作した。

2.2.3 シナリオ

本研究では、Takaku (2001) で用いられたシナリオを和訳し、一部改変して⁽¹⁾ 使用した。先述した視点取得条件と統制条件の各教示文に続き、次のシナリオを提示した。

あなたとあなたのクラスメイトの Aさんは、重要な最終試験の対策をしていました。試験の前日、Aさんはあなたに「先週のノートをコピーしたいから貸してくれない？」と頼みました。Aさんは、試験勉強に集中するためにスマホを家に置いてきており、ノートの写真を撮ることもできないようだったので、あなたはその頼みを聞き入れたうえで、できるだけ早くノートを返してほしいと言いました。

しかし、1時間待っても、Aさんは帰ってきませんでした。あなたはそのノートがなければ勉強ができませんので、心配になり、イライラしてきました。あなたは寮の夕飯の時間が迫っており、もう待てないと思ったので、自習室の Aさんの荷物が置いてある席に「ノートを家まで届けてほしい」と書いたメモを残して帰る

ことにしました。

Aさんにノートを貸してから2時間後、Aさんはノートを返しにあなたの寮を訪れましたが、そのノートは破れていました。Aさんは、「学校のコピー機が壊れていて、少し遠くにある学外のコンビニでコピーしたのだけど、同じ試験を受ける人たちがそのコンビニに殺到していて、コピーが終わるまでに1時間かかってしまった。しかも、帰りに近道をしようと思って車道を渡ったらノートを落としてしまって、ノートが車にひかれて破れてしまった。ごめんなさい。」と言って謝罪しました。

後日、あなたは別のクラスメイトの Bさんから、Aさんが「本当に申し訳なかった、わざとではないことを分かってくれたらいいけど…」と言っていたことを聞きました。

2.2.4 気分の測定

従属変数に対する気分の効果がないことを確かめるため、日本語版 PANAS（川人・大塚・甲斐田・中田, 2011）を用いて感情の状態を測定した。これは、ネガティブ感情とポジティブ感情の2因子から成り、感情の状態を測定するための尺度である。

2.2.5 赦しの測定

日本語版 TRIM-12（Transgression Related Interpersonal Motivation; 高田・小杉, 2016）を用い、「全くそう思わない、そう思わない、どちらでもない、そう思う、とてもそう思う」の5件法によって赦しの程度を測定した。TRIM-12は、報復的動機づけ因子5項目と回避的動機づけ因子7項目より構成されていた（表1を参照）。この尺度では、回避的動機づけや報復的動機づけが低いことをもって、赦しの程度が高いことを表す。

3. 結果

分析に際しては、フリーの統計分析ソフト HAD（清水, 2016）を用いた。

3.1 変数の合成

まず、TIPI-Jによる Big Five の測定の信頼性の検討を行った。各因子の項目間相関が外向性が .551、協調性が .301、開放性が .294、誠実性が .329、神経症傾向が .374（すべて $p < .001$ ）と十分な値を示したので、各因子に含まれる項目の回答値を単純平均して各尺度の得点として用いた。

次に、日本語版 TRIM の因子分析と信頼性係数の算出を行った。日本語版 TRIM の12項目に対して、最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。因子数は元の尺度に従い2因子を抽出した。TRIM の12項目のうち、5項目と7項目が、それぞれ独立の因子に対して高い負荷を示した（表1）。元の尺度に従い、前者を報復的動機づけ項目、後者を回避的動機づけ項目として以下の分析に用いた。クロンバックの α は、報復的動機づけで .89、回避的動機づけ .90 と十分な値を示したため、各因子に含ま

表 1：日本語版 TRIM12 の因子分析結果

項目番号		報復的動機づけ因子	回避的動機づけ因子	共通性
5	A さんが傷つき、みじめな姿を見たい	.876	-.063	.694
1	A さんに罰を受けさせるだろう	.850	-.130	.586
3	A さんに何か悪いことが起こればいいと思う	.763	.107	.708
2	A さんに仕返しするだろう	.730	.059	.597
4	A さんが自分の行為の報いを受けることを望む	.705	.114	.621
12	A さんから遠ざかる	-.158	.979	.769
6	出来る限り、A さんとの距離を取るようにする	.058	.828	.755
10	A さんを避けている	.008	.813	.670
8	A さんを信頼しない	.009	.662	.447
7	A さんが存在せず、近くにいないかのように生活する	.337	.440	.515
9	A さんに温かく振る舞うのは難しいと分かっている	.307	.429	.461
11	A さんとの関係を断つ	.371	.409	.516
因子寄与		5.618	5.546	

れる項目の回答値を単純平均して各尺度の得点として用いた。

PANAS についても信頼性を確認した上で、ポジティブ感情 9 項目 ($\alpha = .85$) とネガティブ感情 10 項目 ($\alpha = .85$) のそれぞれについて回答値を単純平均して各因子の得点として用いた。⁽²⁾

3.2 記述統計

TRIM、Big Five、PANAS の各変数間の相関を、表 2 に示す。また、視点取得の条件ごとの報復的動機づけ得点および回避的動機づけ得点の平均値と標準偏差を表 3 に示す。

3.3 仮説検証

まず、仮説 1 を検証した。仮説 1 の予測は、シナリオ上の加害者に視点取得をする条件では、統制条件に比べて実験参加者の赦しが促進される、というものであった。TRIM の各次元の得点について *t* 検定を行った結果、視点取得の操作による差は認められなかった（報復的動機づけ

表 3：条件別報復的動機づけと回避的動機づけの平均値と標準偏差

	報復的動機づけ		回避的動機づけ	
	統制条件	視点取得条件	統制条件	視点取得条件
平均値	2.01	1.87	2.56	2.37
標準偏差	0.89	0.79	0.96	0.79

け $t(170) = 1.118, p = .265$; 回避的動機づけ $t(170) = 1.461, p = .146$ 。

次に、仮説 2、2'、3、3' を検証するため、Big five の 5 つの下位因子ごとに、視点取得と Big five の各下位因子が、赦しの 2 つの下位因子である報復的動機づけと回避的動機づけに与える効果を、交互作用項を含む重回帰分析により検討した。

3.3.1 協調性が赦しに与える影響の検討

まず、協調性・視点取得を独立変数、報復的動機づけ

表 2：各変数間の相関

	報復的動機づけ	回避的動機づけ	外向性	協調性	誠実性	神経症傾向	開放性	ポジティブ感情	ネガティブ感情
報復的動機づけ	1.000								
回避的動機づけ	.714 **	1.000							
外向性	-.094	.006	1.000						
協調性	-.174 *	-.057	-.041	1.000					
誠実性	.086	.020	-.008	.041	1.000				
神経症傾向	.078	.053	-.057	-.025	-.304 **	1.000			
開放性	-.118	-.056	.315 **	-.137 +	.212 **	-.239 **	1.000		
ポジティブ感情	.071	.005	.074	.061	.178 *	.050	.208 **	1.000	
ネガティブ感情	.272 **	.135 +	-.163 *	-.091	-.049	.311 **	-.127 +	.205 **	1.000

注：** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 4：視点取得・協調性を説明変数とする重回帰分析の結果

説明変数	報復的動機づけ			回避的動機づけ		
	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β
視点取得	-0.161	0.127	-.095	-0.221	0.136	-.124
協調性	-0.112	0.054	-.155 *	-0.027	0.058	-.035
視点取得×協調性	0.119	0.109	.082	0.020	0.116	.013
<i>R</i> ²	.040 ⁺			.017		

注：** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

と回避的動機づけをそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行った。表 4 にその結果を示す。

報復的動機については、協調性が高いと報復的動機づけが下がるという、協調性の主効果が有意となった ($\beta = -.155, p < .05$)。これは、協調性が高いと赦しが促進されるという仮説 2 を支持する結果である。一方で、協調性と視点取得の交互作用は有意ではなかった ($\beta = .082, n.s.$)。そのため、仮説 2' は支持されなかったが、当初の予測に沿ったパターンを確認するため、単純傾斜分析を行った (図 1)。その結果、報復的動機づけに関して、協調性が高い群 (+1SD) では視点取得の効果はみられない ($p = .906$) のに対して、協調性が低い群 (-1SD) では視点取得によって報復的動機づけが低下する傾向は確認された ($p = .098$)。

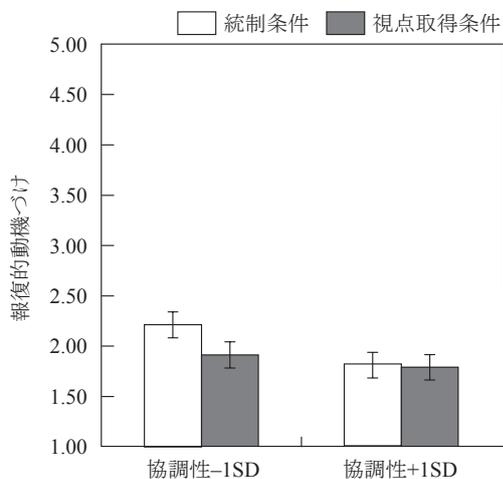


図 1：協調性の高低による視点取得の報復的動機づけへの効果

回避的動機については、協調性の主効果 ($\beta = -.035, n.s.$)、視点取得の主効果 ($\beta = -.124, n.s.$)、交互作用 ($\beta = .013, n.s.$) のどれも有意とはならなかった。

3.3.2 開放性が赦しに与える影響の検討

開放性・視点取得を独立変数、報復的動機づけと回避的動機づけをそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行った (表 5) が、各要因の主効果と交互作用のどれも有意な効果は認められなかった (報復的動機づけ：視点取得の主効果 $\beta = -.098, n.s.$ 、開放性の主効果 $\beta = -.100, n.s.$ 、交互作用 $\beta = .112, n.s.$ ；回避的動機づけ：視点取得の主効果 $\beta = -.124, n.s.$ 、開放性の主効果 $\beta = -.039, n.s.$ 、交互作用 $\beta = .109, n.s.$)。よって、開放性の主効果を予測した仮説 3、および開放性と視点取得の交互作用を予測した仮説 3' は、いずれも支持されなかった。

交互作用は有意ではなかったものの、仮説 3' で事前予測した傾向について確認するため、単純傾斜分析を行った (図 2、3)。すると、報復的動機づけに関して、開放性が高い群 (+1SD) では視点取得によって報復的動機づけは低下しなかった ($p = .892$) のに対して、開放性が低い群 (-1SD) では視点取得によって報復的動機づけが低下する効果が有意傾向であった ($p = .052$)。また、回避的動機づけに関しても、開放性が高い群では視点取得によって報復的動機づけは低下しなかった ($p = .891$) のに対して、開放性が低い群では視点取得によって回避的動機づけが下がる効果が有意にみられた ($p = .031$)。

4. まとめ

4.1 考察

本研究では、Big five の各因子ごとに視点取得による赦しへの効果を調べることを目的として、シナリオ実験を

表 5：視点取得・開放性を説明変数とする重回帰分析の結果

説明変数	報復的動機づけ			回避的動機づけ		
	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β	<i>B</i>	<i>SE B</i>	β
視点取得	-0.166	0.128	-.098	-0.223	0.136	-.124
開放性	-0.064	0.049	-.100	-0.026	0.052	-.039
視点取得×開放性	0.144	0.098	.112	0.149	0.104	.109
<i>R</i> ²	.035			.030		

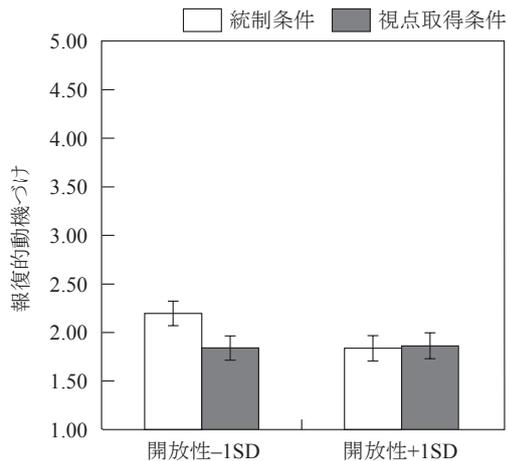


図2：開放性の高低による視点取得の報復的動機づけへの効果

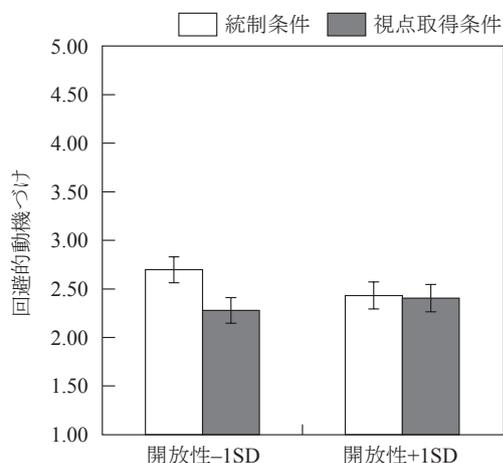


図3：開放性の高低による視点取得の回避的動機づけへの効果

行い、視点取得によって赦しは促進されるが、もともと協調性や開放性が高い人については、視点取得を改めて促すことによる効果はない、という仮説を検証した。

その結果、仮説1の、視点取得によって赦しが促進されるという予測は支持されなかった。これは、シナリオ中で加害者が状況を説明しており、もともと加害者の状況が被害者に分かりやすくなっていたためであると考えられる。視点取得が赦しを促進するのは、被害者が加害者に視点取得をすることで加害者の外部にあった要因に気づくことができるためであると言われている (Takaku, 2001)。今回用いたシナリオでは、このような外部要因が説明されてしまっていたために、視点取得の効果が弱まり、有意にならなかったと考えられる。仮説2の、協調性が高いと赦しが促進されるという予測は、報復的動機づけにおいてのみ支持され、回避的動機づけにおいては支持されなかった。これは、協調性の、争いを避けるという性質のために、効果が報復的動機づけに偏ったからであると考えられる。McCullough & Hoyt (2002) も、

彼らの研究における報復的動機づけと協調性の頑健な負の関係について、次のように考察していた。協調性の報復的動機づけを抑える性質は、加害後の早い段階では加害への攻撃的な反応を抑えるという形で現れ、後になってからは出来事を反芻しない傾向によってネガティブな感情を抱きにくくするという形で現れる、というのである。また、仮説3の、開放性が高いと赦しが促進されるという予測も支持されなかった。Brose, Rye, Lutz-Zois & Ross (2005) は、赦しに関連する尺度を複数用いて、Big Fiveと赦しの関係を検討しているが、開放性との関係が確認されたのは The Presence of Positive Subscale (Rye, Loiacono, Folck, Olszewski, Heim, & Madia, 2001) という、加害者へのポジティブな考えや気持ち、行動が存在するかを調べた尺度のみであった。本研究で使用した TRIM はネガティブな感情、認知、動機の低さによって赦しを測定したために、開放性との関連がみられなかったものと考えられる。

パーソナリティと視点取得の交互作用を予測した仮説2'、3'についても、支持されなかった。ただし、交互作用効果は認められなかったものの、一部、単純傾斜分析の結果では、予測された結果に沿うパターンが確認された。具体的には、協調性が低い群では、加害者への視点取得を促したことによって加害者に対する報復的動機づけが下がったのに対し、協調性が高い群では視点取得条件と統制条件の間で加害者に対する報復的動機づけや回避的動機づけに差がなかった。それと同様、開放性が低い群では視点取得を促したことによって報復・回避的動機づけが下がったのに対して、開放性が高い群では視点取得条件と統制条件の間で加害者に対する報復的動機づけや回避的動機づけに差がなかった。これは、序論で示したように、協調性や開放性がもともと視点取得のしやすさに関連しているため、協調性や開放性が高い群では統制条件においても自ら視点取得を行っていたからであると考えられる。また、開放性では報復的動機づけと回避的動機づけの両方に対して同じような効果があったのに対し、協調性が報復的動機づけの低下のみに効果があったのは、協調性が和を乱すことを避ける性質であるためであると考えられる。

4.2 本研究の限界と結語

本研究では、被害者のパーソナリティによって、加害者への視点取得が赦しを促進効果が異なることが示唆された。視点取得と赦しの関係について、パーソナリティを考慮しつつ、精緻な検討を重ねる必要を示した点には、一定の意義があると言えるだろう。一方、本研究には次の3点の限界や方法上の問題もある。

1つ目が、赦しの尺度 TRIM の測定についてである。赦しは、定義上、ネガティブな感情・認知・動機が低下すること、とされているが、本研究では TRIM を1度測定した数値の高低で赦しを測定した。先行研究 (McCullough & Hoyt, 2002; Burnette, McCullough, Van Tongeren, & Davis, 2012; Exline, Baumeister, Bushman, Campbell & Finkel, 2004

など)でも同様の手法は採用されてきたとはいえ、今後は、TRIMのような尺度でネガティブな感情・認知・動機を2度測定して、その差を赦し得点とするなどの工夫は必要であろう。また、2つ目に、本研究はシナリオ実験であるため、得られた結果は、友人からこのような扱いを受けた場合こう感じるであろうという、参加者の予想を反映したものに過ぎない。そのため、実際に傷つけられた場合に同様の反応が起こるかは定かではない。今後の研究では、現実場面で同様の結果が得られるかどうかを検討する必要がある。最後に、本研究で扱ったシナリオの深刻さについてである。本研究で扱ったシナリオは、日常的に起こりうる加害場面を扱ったものであった。しかし、今後、この知見を実際の介入の現場へ応用していくことを検討するにあたって、より深刻な場面を扱う研究も必要であると考えられる。

今後は、以上の限界や問題を克服するような実験を行い、赦しに至るパーソナリティ要因と視点取得などの心的過程との関係をさらに検討する必要があると考える。

注

- (1) 一部改変した理由は、一つには、元のシナリオは2001年に使用されたものであり、今の時代にそぐわず不自然に思われる点が多かったことである。例えば、「ノートがコピー機に詰まった」という表現があったが、現在日本で一般に用いられているコピー機では原稿をコピー機の中に入れるという操作は行わないため、実験参加者がシナリオの状況について現実味をもって想像することを妨げると考え、変更に至った。またもう一つには、加害者が故意ではなかったことを印象付けるため、第三者からの念押しという形で再度提示した。
- (2) 視点取得の条件操作によってポジティブ感情 ($t(170) = 0.967, p = .335$)、ネガティブ感情 ($t(170) = -0.379, p = .705$)には差がなかったため、これ以降条件によるTRIMの値の差について検討する際にはPANASは考慮しないこととした。

引用文献

- Ashton, M. C., Paunonen, S. V., Helmes, E., & Jackson, D. N. (1998). Kin altruism, reciprocal altruism, and the Big Five personality factors. *Evolution and Human Behavior*, 19 (4), 243-255.
- Baskin, T. W. & Enright, R. D. (2004). Intervention studies on forgiveness: A meta-analysis. *Journal of Counseling & Development*, 82 (1), 79-90.
- Brose, L. A., Rye, M. S., Lutz-Zois, C., & Ross, S. R. (2005). Forgiveness and personality traits. *Personality and Individual Differences*, 39 (1), 35-46.
- Burnette, J. L., McCullough, M. E., Van Tongeren, D. R., & Davis, D. E. (2012). Forgiveness results from integrating information about relationship value and exploitation risk. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38 (3), 345-356.
- Day, A., Casey, S., & Gerace, A. (2010). Interventions to improve empathy awareness in sexual and violent offenders: conceptual, empirical and clinical issues. *Aggression and Violent Behavior*, 15, 201-208.
- Exline, J. J., Baumeister, R. F., Bushman, B. J., Campbell, W. K., & Finkel, E. J. (2004). Too proud to let go: narcissistic entitlement as a barrier to forgiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87 (6), 894.
- Fitzgibbons, R. P. (1986). The cognitive and emotive uses of forgiveness in the treatment of anger. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 23 (4), 629.
- Freedman, S. R. & Enright, R. D. (1996). Forgiveness as an intervention goal with incest survivors. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 64 (5), 983.
- Hebl, J. & Enright, R. D. (1993). Forgiveness as a psychotherapeutic goal with elderly females. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 30 (4), 658.
- John, O. P., Donahue, E. M., & Kentle, R. L. (1991). *The big five inventory—versions 4a and 54*.
- 川人潤子・大塚泰正・甲斐田幸佐・中田光紀 (2011). 日本語版 The Positive and Negative Affect Schedule (PANAS) 20項目の信頼性と妥当性の検討. 広島大学心理学研究, 11, 225-240.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21 (1), 40-52.
- McCullough, M. E., Bellah, C. G., Kilpatrick, S. D., Johnson, J. L. (2001). Vengefulness: Relationships with forgiveness, rumination, well-being, and the Big Five. *Personality and Social Bulletin*, 27, 601-610.
- McCullough, M. E., Bono, G., & Root, L. M. (2007). Rumination, emotion, and forgiveness: Three longitudinal studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 490-505.
- McCullough, M. E. & Hoyt, W. T. (2002). Transgression-related motivational dispositions: Personality substrates of forgiveness and their links to the Big Five. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28 (11), 1556-1573.
- McCullough, M. E., Rachal, K. C., Sandage, S. J., Worthington, E. L., Wade-Brown, S., & Hight, T. (1998). Interpersonal forgiving in relationships II: Theoretical elaboration and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 1586-1603.
- McCullough, M. E., Worthington, E. L., & Rachal, K. C. (1997). Interpersonal forgiving in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 321-336.
- Miller, C. W., & Roloff, M. E. (2014). When hurt continues: Taking conflict personally leads to rumination, residual hurt and negative motivations toward someone who hurt us. *Communication Quarterly*, 62 (2), 193-213.
- Romero, C. (2008). Writing wrongs: promoting forgiveness through expressive writing. *Journal of Social and Personal Relationships*, 25 (4), 625-642.
- Rye, M. S., Loiacono, D. M., Folck, C. D., Olszewski, B. T.,

- Heim, T. A., & Madia, B. P. (2001). Evaluation of the psychometric properties of two forgiveness scales. *Current Psychology*, 20, 260-277.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD—機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73.
- Sandage, S. & Worthington Jr, E. (2010). Comparison of two group interventions to promote forgiveness: Empathy as a mediator of change. *Journal of Mental Health Counseling*, 32 (1), 35-57.
- Trainer, M. (1981). Forgiveness: Intrinsic, role-expected, expedient, in the context of divorce (Doctoral dissertation). Boston University, Boston, MA.
- 高田菜美・小杉孝司 (2016). 侵害における対人動機づけ尺度の作成. *心理学叢誌*, 16, 97-103.
- Takaku, S. (2001). The effects of apology and perspective taking on interpersonal forgiveness: A dissonance-attribution model of interpersonal forgiveness. *The Journal of Social Psychology*, 141 (4), 494-508.
- 登張真稲 (2003). 青年期の共感性の発達—多次元的視点による検討—. *発達心理学研究*, 14 (2), 136-148.
- Toto, R. L., Man, L., Blatt, B., Simmens, S. J., & Greenberg, L. (2015). Do empathy, perspective-taking, sense of power and personality differ across undergraduate education and are they inter-related?. *Advances in Health Sciences Education*, 20 (1), 23-31.
- Welton, A. J., Vickers, M. R., Kim, J., Ford, D., Lawton, B. A., MacLennan, A. H., Meredith, S. K., Martin, J., & Meade, T. W. (2008). *Health related quality of life after combined hormone replacement therapy: Randomised controlled trial*. *Bmj*, 337, a1190.

(受稿：2019年1月9日 受理：2019年3月14日)